

藤野健司

絵を描く

彼は 絵を 描いた

十歳で家族を失い

生きる基盤を隔離で失い

子供を持つ自由を失い

人生の否定の中で

彼は 絵筆を 取った

生きること そして その存在を

確かめるように

彼は 絵を 描いた

絵の中の 光は

とても やわらかで おだやかだった

それは 彼がもとめた 家族のすがただったのか

やがて 彼は 日常の 光をも失った

彼は 何もかも失ったなかでも

なお 絵を 諦めなかった

彼は いま 見えない絵を 描いている

心の絵筆を友として